

質疑応答

小林 正弥（千葉大学人文社会科学研究所教授）：いろいろな話がありましたので私が少しまとめてから、みなさんに質問をしてもらい、答えていきたいと思えます。

私の講義と石戸先生の講義の関係について振り返ってみます。初めに私が幸福についての公共研究について説明しました。最後に石戸先生のお話に出てきた功利主義は、私の講義では「福利型」に分類されます。功利主義はひとりひとりの快樂、つまり喜びと苦しみを数量的に捉えて、みんなの分を合計して考えるのです。その総量が最も多いものが良い政策、良いことであるという見方で、実はこの考え方がその後の主流派の経済学につながっていきます。

石戸先生がお話になったいわゆる主流派の経済学では、実は福利型の考え方が基礎にあります。石戸先生がなさった GDP や貿易の説明では、そういった経済的な発展が幸福に繋がると考えられています。簡単に言うと、福利型の考え方を基礎に、学問として経済の領域で幸福の増大を追求しているのです。でもこの福利型の考え方は、経済学だけではなく、政治学や社会学にも非常に大きな影響を与えています。そこで政治経済、社会全体に通じるようなものの考え方を福利型と呼んでいます。

ついでに言うと、自由型思想では自由な権利を中心に考えていたと言いましたが、この考え方は法律に非常に強く現れています。みなさんの中には法律を中心に学んでいく人もいますが、この自由型の考え方をより専門的に追求していくわけです。

それに対して私が重点を置いている美徳型は、善き生き方の問題を重視しているので宗教的ないし倫理的な考え方の中に非常に強く現れています。そし

て公共哲学においても、このような発想が政治経済などの公共的領域にも必要だとする美德型の公共哲学があるのです。石戸先生が話されたフェアトレードやブータンの話は経済においても注目されていますが、これらは美德型の発想に非常に近いと思います。

この3つの公共哲学の考え方について私は「これだけが正しくて他は間違っている」というように思っているわけではありません。どれが重視されているかについては学問によって違うわけですが、今までは例えば経済学では福利型だけに依拠する考え方が強かったのです。法学や政治学では自由型だけが正しいという考え方もありました。私は美德型も大事だと思っていますので、そういった従来の考え方に加えて、美德型の発想も入れて考えていく必要があるのではないかと思っています。石戸先生がブータンの話も紹介して下さいましたので、最後の方に私が話した「幸福の経済学」のいちばんのポイントになっているところを実例でみなさんは知ることができたと思います。

先ほど指標の話をして国民総幸福量についてもふれましたが、石戸先生が紹介されたブータンの状況や人々の意識はとても新鮮で私たちに再考を迫っています。従来 GNP や GDP を最大化することを目標と考えていたけれども、ブータンの試みを見ると、別の見方をしなければいけないのではないかと問題提起がなされたのです。だからブータンに注目が集まることは、幸福を考え直す大きなきっかけになっているのです。

私の講義では、最近の心理学の展開を踏まえながら、人間の心の幸福も考えていく必要もあるということをお話ししました。従来の経済学で扱われているお金や物による幸福だけではなく心の幸福も考えて、両方で幸福を見ていく必要があります。そのためにはどのような指標を使っていくのかということが現在の幸福研究のフロンティアになっています。この研究は経済学でも心理学でも始まっていますし、私としては政治学でもそれを展開していく必要があると考えて、「美德の政治学や経済学」について話しました。

石戸先生が賀川豊彦について触れてくださいましたので、私からもお話しします。私自身も友愛について『友愛革命は可能か』（ちくま新書）という本を

出していて、その中の大きなポイントは賀川豊彦の経済理論です。彼は石戸先生が紹介して下さったように協同組合運動の創始者ですが、従来の経済学の考え方に対して友愛を中心にする経済学を提起しました。友愛や愛は先ほど私も紹介しましたように、非常に重要な美德です。

「人間関係が幸福にとって大事だ」とか、「ポジティブな感情の中で愛や親切が大事だ」という話を先ほどしましたが、「愛が経済や政治の原理においても実はとても重要ではないか」という問題提起が賀川の議論からなされます。これは、「美德の公共哲学」にとって大事な問題なのです。

公共哲学では、阪神淡路大震災以来、人々が自分たちでボランティア活動をはじめさまざまな公共的な活動をすることを重視しています。その中身には、政治的な活動もありますし、まちづくりや環境、ケアのボランティアなどいろいろあります。そのような活動は、先にふれた親切な行為です。これが今の日本にとっても世界にとっても大事であると公共哲学で強調されているわけですが、それは幸福感にとっても非常に意味があるのです。そのような活動することは個人にとっても幸福度を増しますし、公共的な貢献にもなるわけです。このように石戸先生の講義と私の講義はかなり密接に関連していますので、そのように捉えていただければ全体として理解が深まると思います。

小林：さて、それでは質問等がありましたら手を挙げて下さい。

学生：法学科4年です。小林先生のスライドで6つの美德のカテゴリーに則って行動すれば人間は幸福になれるというポジティブ心理学の話聞いておもしろいと思いましたが、国などでもこれらのカテゴリーに則って運営していこうという発想なのでしょうか。もうひとつの質問は、人間で言うと、これらがバランスよくあればいいと思いますが、偏っている場合はどうでしょうか。例えばスピリチュアリティだけに偏ってしまう人は、カルト的で少し危ないように思えます。国で考えた場合にはいろいろな人がいると思いますので、それぞれ6つの強みを持つ人の間で対立した時にどのようにするのがいいのでしょうか。

小林: ありがとう。とても鋭い質問だと思います。もう少し説明しますと、こういった美德や人格的な強みがいろいろな文化でこれまで尊重されてきていて、それぞれの美德について科学的な研究などが進展しています。実はこの話と幸福の話はどのようにつながっているかという、ウェル・ビーイング（良好状態）を計測する際の要素が5つあると現在考えられており、美德や人格的な強みが発揮されると、良好状態の諸要素も高くなる傾向があると理論的には推定されます。そしてポジティブな感情の比率が高まるとか、より没入できるようになるとか、より良い人間関係ができるとか、より深く意味を感じるようになるとか、達成感が高まるというようなことが起こると、幸福になる傾向があると理論的には考えられるのです。いろいろな文化でこれらの美德が尊重されているということは分かっていますが、科学としては「それぞれの美德や人格的な強みがこの5つの要素や幸福感にどのように影響を与えるのか」という関係についてはまだ研究が本格的に進んでいるとは言えません。

先ほど言いましたようにポジティブ心理学は2000年ごろからスタートしていますので、さらにこういった関係について研究を進めていく必要があると私は思っています。今まではどのような調査がなされているかと言いますと、例えば美德ないし人格的な強みのリストの中で、どれが自分は強いかということ进行调查しています。例えばみなさんがその調査票を使って、自分はこの中でどれが強みかということ調べられます。

「ある人は勇気が強い、別の人は正義が強い」というように、自分で分かりますし、他の人が調べることもできます。そうすれば、自分自身が幸福になって、健康になったり成功したりするためには、自分の強いところを活かしていくことが大事であるとわかります。例えば「どのような仕事に就くべきか」とか、「どのような適性があるか」とかを考えたときに、例えば学者になるには確かに知識・知恵が強い人が向いているでしょう。警察官や消防官になる人は勇気の部分が強い方がいいでしょう。企業でも、どのような部分が強いかを調べて部署や役割を考えるとということもできるでしょう。

これまでのところでは、このように主として個人について考えられているの

です。そして実際にはそれぞれの人には強いところと弱いところがあるので、強いところをなるべく伸ばしていくことが勧められています。ただ先ほど質問にあったように、「ある美德や強みに偏っている場合にはまた問題があるのではないか」ということも問題としてはあり得ると思います。これは今後の研究の課題でしょう。

美德は個人の特性ですが、幸福度の調査については個々人だけでなく社会についても行われ始めています。例えば先ほど挙げたオーストラリアのアデレード州で、その地域の人々に対して大規模な調査を行っています。調べてみると弱いところがあるのでそれに対して、教育や医療・ケアなどの公共政策を立案することが可能になります。

今の質問は非常に鋭くて、強みに偏りがあるときにどうするのかということでしたが、プラトンやアリストテレスのような哲学の観点から私は最終的には社会全体としてみたときにはやはりバランスがあった方がいいと思っています。ただ、科学的には今後研究が進められなければならない論点でしょう。

学生：石戸先生に質問です。今のアベノミクスの政策はGDPを大きくすることを第一にしていると思います。これは今の講義からすると幸福ではなくすごく功利主義的な豊かさを目指しているものだと思いますが、石戸先生はこれから日本が幸福になるにはどのような方針転換をすることが幸福に向かうとお考えですか。

石戸 光（千葉大学法政経学部教授）：アベノミクスはまさにTPPも絡めて功利主義的な意味で物の量などを多くすることが主眼のひとつであることは間違いないと思います。ただそれに加えて、豊かさが実感できるというふうに、(安倍首相も言っているように)プラスアルファの部分を今一生懸命考えていこうともしているようです。その具体的な在り方としては、例えば地域レベルでなるべく地方自治ということ、単に政策という意味の地方自治ではなく、例えば地元の自治会の活動、私も今、班長をやっていますが、自治会の活動のような

自発的なグループということを通じて人と人が繋がりがあって知り合って、地元のお祭りなどいろいろな機会に顔を合わせよう。またごみ拾いなどをしながら地域をきれいにしましょう、という活動をするのも併せて議論されているというふうには私は思っていますので、おそらく功利主義的なあり方であるべく必要な種類の品物、財を増やしていきながら、あるいは少子高齢化ということで消費があまり減っていってしまうことがないように、そこは（功利主義的に）最新技術も活用しながら、その器の上に、人と人の関わりをなるべく多くしていこう、というソフト的な部分を盛り込む。その両輪でいくことが日本の幸福に繋がるのではないかと私は思っています。

小林：石戸先生は貿易に関して TPP にふれられました。私の理解では先生の説明は主流派の経済学で幸福を増進するという功利主義的な観点から話をしておられたような気がします。その後に話されたフェアトレードやそれ以外の幸福の話との関係はどうか。TPP に関して思想的にどのように考えていらっしゃるのかという点はかなり大事な問題だと思いますので、少し伺いたいと思います。

石戸：TPP といいますのは、端的にいいますと、かなり功利主義的な枠組みです。ここで、賀川豊彦が賀川イズムということを行いました。市民で連帯しよう、友愛のコミュニティを、ということから戦争を止めて友愛の空間、ドイツもフランスも戦争をやめましょうよという賀川イズムが EU か EC に流れているのです。このことは 1950 年代 1960 年代の方の EU の議長さんも認めていることです。賀川の著書『友愛の経済学』は英語で先に出ましたので、EC の設立に繋がった。そしてそれが実は APEC (Asia Pacific Economic Cooperation) アジア太平洋経済協力が 1989 年につながり、この EC と地域的に釣り合いを取るために、ヨーロッパに EC あるならアジア太平洋でも経済協力をしようということで APEC が設立され、その APEC メンバーの一部からアメリカ主導ではありますが生まれたと言われているのが TPP なのです。

ですから、ある意味では TPP は功利主義的で、もっと言いますと自由主義的——自由に儲けて何が悪いという——発想でアメリカ主導であることは否めないと思います。ただし 21 の国と地域の APEC の一部分が TPP ということになっていて、いずれ新聞でも出てくると思いますが、今後は FTAAP (Free Trade Area of the Asia-Pacific、アジア太平洋自由貿易圏) という APEC 全体で自由貿易圏コミュニティづくりをしましょう、アメリカはそれを TPP を通じて、というふうに言っているが、実は中国が入っていないものですから、中国は APEC 自体の方で FTAAP をつくっていきましょうと言っている。私も TPP を途中段階として有効活用しながらも、より APEC の理念を重視しながらのアジア太平洋自由貿易圏 FTAAP の創設を主張している。

なぜかという、こちらのルートでいきますと APEC (アジア太平洋経済協力) のスピリットは (名前の通り) 経済協力であって、そのおもとにあるのは連帯・友愛ということで、戦争をなくす、平和なそして繁栄した社会を作っていこう、ということとつながるのです。賀川豊彦という人の友愛の経済学が英語でもともと出て、それが EC の形成、ひいては (TPP を生んだ) APEC の設立に一役買っているという隠れた歴史がありますので。

小林: ありがとうございます。では次の質問をお願いします。

学生: 法政経学部 1 年です。石戸先生に質問したいのですが、ブータンを旅したということで今回ご紹介いただきましたが、ブータンという国は江戸時代的な日本のような戦国体制を以前取っていたということで、今の日本からかなりかけ離れている。少なくとも例えば 1999 年までインターネットがなかったことや、その中でブータンは開放政策を採り続けて、国民が世界の情報を知ることによって国民の不満がかえって高まったという日本や他の先進国と比較する中でブータン国民の幸福度が下がったという話を聞いたことがあります。それについてどのようにお考えになるか、ということと、ブータンを旅してどのような部分が日本に活かせるか、取り入れたいかということがあれば教えてください。

石戸：このブータンの民族衣装ゴは1着でこれをずっと着ている人が多く、江戸時代のようなだと思いますが、ブータンは選択的に英語とネットは世界に先駆けて導入しました。これはやはり世界とやり取りする上で大事だということで、ものすごく普及しています。山岳地帯でも中継基地を使わなくても衛星であれば携帯を使えますので、衛星で使えるネットや携帯をとて重視しています。英語も私よりはるかにうまい。そのような先進的な面がありながらもこのような伝統的なものでいきましょう、という価値観の国です。

そして最近言われ出したように、ブータンの豊かさがむしろ西洋の便利さを知ってしまったがために失われているのではないか、という議論があります。それは「ブータン方程式」、「豊かさの実感というものは、物質÷欲望である」、これはブータン関係者によって言われていることですが、心の豊かさ=幸福は、物質的GDP的なことを欲望で割り算して、もし西洋社会の便利さでも、何だわれわれは他と比べるとこれでも少なかったのか、もっとほしいというこの気持ちが大きくなってしまうと、欲望には際限が無くなります。ですからポルシェを5台持っても、10台ないことが不満になってくる。欲望が大きくなると物質がGDP的に2%、3%上昇したとしても、欲望が200%、300%増大していけば豊かさは結局感じられない社会、不満社会になってしまふ。

だから、このような構図で人々が西洋社会をテレビで見たり、いろいろなかたちで物質の豊かさに触れる中で、どちらが大事か、心の豊かさか、あるいは物質が大事でもっともっとほしい、という欲望が刺激されているかが大事な点です。物質が多くなる分にはいいと思います。欲望が刺激されないかたちで豊かさを保って、あるいはもっと豊かに感じるということが日本社会でも心の面を重視することで起こることを期待したい。「公共」の考え方とはそのようなことで、豊かさとはどのようなものだろう、ということ、例えば「ブータンでは、こんなことを感じてきた」という形で将来「公共」などという授業科目の中で紹介されるようになれば、「結局豊かさとは携帯電話が3台あるとか、そのような話だけでなく、むしろ欲望がもっと膨らんでしまったら逆に不満になるかもしれない」、ということも日本人が教養として踏まえておくべきこと

になるのではないのでしょうか。

それによって公共市民の心の持ちようが変わる。日本は物質的には豊かですが、それをまだまだ足りず不満とみるか、豊かとみるか、心の持ちようによって違ってくるのではないかと思います。

小林：ありがとうございました。最後の質問にしましょう。

学生：法学科3年です。ポジティブ政治経済学のところで、ネガティブな現象を防止するための制度だけではなく、より善い生を実現するための公共的意識が必要というお話しがありましたが、一つ目のネガティブの問題解決のアプローチと二つ目のポジティブな問題解決アプローチとの関係やこれを両立させる具体的な方法についてどのように考えていますか。

小林：ありがとうございます。とても重要なポイントですね。心理学の方でもネガティブな心理から回復するための従来の心理学に対して、ポジティブな心理の実現を目指すポジティブ心理学が新しく出てきたわけですが、その次の課題として「この2つの心理学を統合する必要があるのではないか」という考え方があります。私もそのような統合的な心理学が必要だろうと思います。

同じように、ポジティブな政治学を考えるときにもやはり従来の政治学との関係を考えていずれば統合する必要があるだろうと思いますし、ポジティブな公共哲学に関してもそれが必要だろうと思います。現実の政治を考えてみた時に、民主主義に対して独裁を阻止するということはネガティブな状態を阻止するわけですが、そのための仕組みとして立憲主義や三権分立、あるいは権利の尊重などがあります。これは従来の政治学や法学が非常に重視していたことで、今後も重要だと私は思っています。

それに加えて、ポジティブな政治を実現するために美徳や共通善も重視していく必要があるだろうと考え、これをポジティブ政治学と呼びました。しかし従来の立憲主義や三権分立などの考え方が要らないのではなくて、両方が必要

ですし、この2つの間に矛盾はないと思います。

というのは共和主義という思想においては、実は両方の流れが重視されているのです。制度的に独裁を阻止することと、人々の公共的な美德に基づいて共通善を実現する政治という両方が歴史的に重視されているからです。そこでその伝統に則して両方の側面をしっかりと直視すべきです。ただどちらかと言うとポジティブな理想の方は今までの政治学では軽視されてきているので、そこらもしっかり目指す必要があるだろうと私は思っています。

公共哲学においても、ネガティブな権力抑圧を回避するためのリベラルな公共哲学は今後なお大事です。これに対して、美德型公共哲学は政治哲学ではコミュニタリアニズムと言い、ポジティブな理想の実現を目指します。コミュニタリアニズムもリベラルな考え方と必ずしも矛盾するものではないので、リベラル・コミュニタリアニズムという表現が用いられることがあります。この方向で、自由型と美德型の両方を重視してその統合を図ることも可能だと思います。

その統合を実現するためにはもっと細かく考えていく必要がありますが、大きな方向としては思想的にも制度の仕組みとしても両方統合していくことが大事だろうと思います。例えば、「国家＝公」の権力の干渉に対して「個人＝私」の自由を守ることは、やはり非常に大事です。ですから、ネガティブな政治を阻止するために自由主義は重要です。他方で「国家＝公」だけに頼るのではなく、人々による「公共」の活動を増やしていくことはポジティブな方向です。だから国家と区別された公共を実現していくことが大事です。さらにそれに支えられて国家という「公」が共通善を実現することができるようになれば、「国家＝公」がポジティブな機能を果たすことになります。公共哲学ではこのように双方の要素の統合を目指していると言えるでしょう。

とても素晴らしい良い質問をいただいてわれわれとしても嬉しく思っています。ありがとうございました。最後に、公共学会の会長でいらっしゃる倉阪先生から締めあいさつをお願いします。

倉阪 秀史 (千葉大学人文社会科学研究所教授) : みなさんお疲れ様です。財

やサービスの豊かさ、特にフローの豊かさ、たくさん物を作る豊かさ、たくさんサービスを生み出すことが幸福に繋がっているかどうか、それに疑問を感じる人がたくさん出てきている。その中でどのようにそれを繋げていくかという重要な議論がなされていたと思います。

私自身の研究テーマとしては、フローの豊かさではなく、もうひとつ測れるものとしてストックがあるので、ストックの方をきちんと健全に維持するということをひとつの政策目標にする。幸福を測るのはなかなか難しいので、その中間項としてフローではなくストックに目をつける、そういった政策転換が必要ではないかということ进行研究しています。そのあたりはいろいろなかたちでアプローチができますので、みなさんはみなさんなりにアプローチしていただきたいです。大変大きなテーマでやりがいのあるテーマだと思いますので、今後とも関心を持って幸福の問題、あるいは公共性の問題に取り組んでもらえればと思います。今日はお疲れ様でした。

小林：長時間ありがとうございました。